

こんな本
あんな本

「童話への招待」

神宮輝夫著・日本放送出版協会



本田 和子

——子どもが妖精の国に行きたいとき
道はいくつもある。ある子どもは、心か
ら行きたいと思つてねむると、いつのま
にか、のぞみの海をボートで渡っている
ことに気づく。ボートはやがて湾にはい
り夢の川をさかのぼつて、めぐす国には
いる。ある子どもは、庭の金魚池をじっ
と見つめていると、あぶくがうかんでき
て、それが割れて、「あなたはどんな願
いがあるか？」「池をじつと見ているのか？」
という声のでてくる。子どもが「妖精の
国へ行きたい」と答えると、その声があ
ぶくになって沈んでいく。やがて少女
は、自分が、池にうつっていた影の方
のりうつつて、どんどん水の中へ沈んで
いくのに気がつく。そして、あつと思つ
たときには、もう妖精の国にきている。

——「童話への招待」から——

ここに引用された妖精の国への入国法
は、イギリスの児童文学者アーサー・ラ
ンサム著書からとられたものです。昔
昔、人間の先祖たちは、各々の国にさま
ざまな妖精（小人・家の霊などすべて不

思議な異形のものの意）を住まわせてい
ました。北欧のトロール、スコットランド
のブラウニー、アイヌのコロボックルな
ど、その代表でしょう。

ところで、文化が進むにつれて、人間
の社会は妖精たちにとって住みにくい所
と変わってきました。何よりもおとなが
妖精をきらい始めたからです。宗教の名
のもとに、あるいは合理主義の風を受け
て、妖精たちはしばしばその生存をおび
やかされています。そんな中で、けんめ
いにこの小さな者の生命を守り続けたの
は、子どもたちと、子どもと同じ心を持
つて子どもを愛する一群の人々でした。

私も、子どもと共に生きようとする
おとなとして、子どもたちがこんなにも
大事にしてきたこの目に見えない世界
をのぞいてみる必要がありそうです。そ
こで展開される冒険や愛情の物語を通し
て、その中ではねまわり、いたずらを
し、いきいきと生き続ける主人公をいとお
しむことよって、子どもと一つにな
る機会を持つてみてはどうでしょうか。

この本は、そんな世界へ私どもを導き入れる手引きをしてくれます。

全部で八つの章から構成されていますが、各々の章で十八世紀以降の代表的なフェアリー・テイルズ、あるいはファンタジーが紹介されます。例えば第一章「ペローとグリム」では、シャルル・ペローとグリム兄弟によって採録され再話された昔話を対照させながら、昔話の驚異と恐怖、その形式などさまざまに昔話の魅力をとき明かしてみせます。第三章「水の子とアリス」では、キングスレイの「水の子」が、おとなが子どもを理解する過渡的段階の作品として位置づけられていて、フェアリー・テイルズとは異なる想像力の世界、つまりファンタジーの先駆として評価されます。但し、著書は、これは児童文学の歴史の上での評価であって、現代の子どもに読ませる必要はないだろう、と註をつけることを忘れてません。このあたりに、行きどいた案内人としてのこの本の性格をみることでできそうです。

第六章「二十世紀のファンタジー」では、「クマのプーさん」「メアリー・ポピンズ」「ナルニア国物語」など、現代の子どもたちになじみ深い物語が数多く扱われています。愉快な子ぐまのプーの物語は、おとなのための作家が全力をあげて子ども部屋に取り組んだ例として紹介され、子どもにとっては子どもの世界そのものを描いた作品であり、おとなにとっては失われてしまった宝のようなスタルジアの世界として評価されます。

これに比して、「ナルニア国物語」は一九五〇年代の時代精神を反映し、ほろびと復活と永遠をテーマとして扱い、人間の未来への警鐘、永遠を求めることによって到達し得る未来への確信を、幼い人々に伝えるための大アレゴリーとしてとらえられています。

著者は、フェアリー・テイルズを、昔話に代表されるいわゆる公認された魔法の世界の物語、ファンタジーを、現実への密着度がより高く、時代をはなれては成立し得ない空想の物語として区別して

います。この「ナルニア国物語」など、まさしく二十世紀のファンタジーの典型というのでしょうか。

さて、こうしてこの本は、私どもをさまざまな作品に出会わせ、その生い立ちと性格を手際よく紹介してくれます。そして私どもに、これらの作品ともう一度深くつき合ってみようかな、という気持ちを起こさせるのです。とかくイデオロギー性の勝ったものや、逆に、あまりにも性急な實際性に富みすぎた児童文学論の多い昨今、楽しく素直におとなを手引きしてくれる本の一つといえましょう。

——子どもの文学に対するおとなの圧迫は、今も過去のものとはいえない。現在のおとなが、宗教や道徳や、知識偏重や公式的なイデオロギーで、たえず子どもを文学をしぼることはやめているとしても、べつの偏見で、真に子どもの求めている文学を圧迫していることは十分に考えられる。おとなは子どもの文学について、つねに謙虚でなくてはならない。

——「同書」より——